

巻頭言「来年はミヤイリガイ発見 100 年記念」

名誉館長 多田 功

大正 3 年、英国の熱帯医学者レイパーは中国での調査後、日本を訪れました。前年に日本の宮入・鈴木という研究者達が住血吸虫という寄生虫の感染にはカイ(後にミヤイリガイと命名)だけが中間宿主として必要だと言うことを証明していたので、確かめに来たのでした。日本での住血吸虫に関する研究の進歩に彼は驚倒したという。広島で採集したカイとネズミでの感染実験を上海に帰る船上で行い、それが正しいと知ったレイパーは直ちにアフリカでの研究を企てました。そして他 2 種の住血吸虫の中間宿主具を見つけることに成功しました。21 世紀初めの現在、世界で 2 億人の感染者がいる住血吸虫病感染に関する研究は桂田、宮入、藤浪といった日本人によって始められたことを思い起こしたい。中でも、他の吸虫と違って、住血吸虫感染にはカイだけに関わることを発見した宮入・鈴木の業績は大きい。

来年はミヤイリガイとその意義の発見から 100 年という節目にあたります。これを記念して当記念館は 3 月に日本寄生虫学会と協力してシンポジウムを東京で

開きます。更に 11 月には宮入先生が教授を務めていた九州大学医学部の図書館で記念展示を実施する。それは単に過去の業績を顕彰するだけで無く、今後の日本には科学と技術の振興が如何に大切かを市民特に若い人々に知って頂く趣旨です。

橋本首相がサミット会議で言い出し、世界の寄生虫対策に日本が積極的に貢献するという橋本イニシアチブ(1998)は有名です。世界保健機関(WHO)の多くの会議でも今でも目にする名称です。最近 WHO は NTD(顧みられない熱帯病)という概念で世界の寄生虫病など 17 疾患(罹患 10 億人)を強調しています。住血吸虫病もその一つです。小さな NPO 法人である宮入慶之助記念館を支えて下さっている会員には、現在も住血吸虫病の流行地であるアフリカなどで防圧研究に従事している熱帯医学者が多数おられます。記念館ではそれらの方々の現地活動記録などを近く館内に展示する予定です。明治開国の数十年後から日本人によって始められた住血吸虫病制圧研究の伝統が世界に貢献し続けることを心から願います。

カイ発見 100 周年にむけて

館長 宮入源太郎

中間宿主カイ発見 100 周年になる来年は、この 100 年の歴史を振り返るとともに住血吸虫病と人類をとりまく環境の現状を考える活動を展開したいと考えています。

先人の努力により我が国では平成年代になって各地に安全宣言、終息宣言が発せられましたが、世界各地では今も住血吸虫とのきびしい闘いが続けられています。一方、我が国ではこれに対する防疫体制が解かれてこの病気に対する専門家もつぎつぎと現役を退いています。地球の温暖化

や社会活動のグローバル化により我が国の安全な状態が今後も維持できるのかと心配する声もあります。宮入慶之助記念館は北信濃の片隅にある小さな展示施設にすぎませんが、開館して 13 年、多くの方々のご支援により蓄積された私達の持てる力の限りをつくして、一人でも多くの方々にこの 100 年と現状について知っていただくことを目指して、2013 年にはつぎのような計画をすすめています。

皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

○ 3 月 東京医科歯科大学(東京都文京区湯島)で開催される第 82 回日本寄生虫学会大会で

- (1) 国立科学博物館による記念展示に協力 (2) 市民公開シンポジウムに協力
- 6月 国立科学博物館(東京都台東区上野)で開催される記念企画展に協力
 - 8月 * 目黒寄生虫館(東京都目黒区下目黒)での記念企画展示に協力
*長野市内で記念企画展(寄生虫のふしぎ)を開催
 - 10月 「宮入慶之助記念館だより」特集号を発行
 - 11月 九州大学医学図書館(福岡市東区馬出)で開催される記念企画展に協力

「祖父 慶之助ゆかりの地」を尋ねてーその2ー

会員 宮入聰一郎

今回は慶之助が九州帝国大学に在勤時代の住居(現福岡市中央区唐人町)を報告しましたが、今回は退官後の住居を尋ねました。ここは旧町名「古小鳥町 60」現町名「中央区警固(ケゴ)3丁目 166」です。慶之助一家は、彼が60才で退官する大正14年頃、約20年間暮らした枳小屋町から古小鳥町に移り住みました。その後、昭和5年ごろ東京(旧地名「東京市北豊島郡上練馬」)に転居し、昭和17年ごろ再び福岡へ戻りました。

太平洋戦争が激化した昭和20年6月の福岡大空襲で庭に焼夷弾が落ちたことから身の安全を考えてこの住宅を売却して、妻ナヲを伴い故郷の信州・西寺尾村(現長野市西寺尾)に疎開しました。

筆者は祖父の家で生まれて疎開当時は3才であったため、祖父母と和室で写した写真と住居脇の坂道での写真があるものの当時の記憶はほとんどありません。

記念館だより第7号(平成19年6月発行)で佐伯仁子さんが「古小鳥 宮入慶之

助先生旧宅付近を訪ねて」で当時の思い出と平成18年に約64年ぶりに現地を訪れた様子を執筆されています。この内容とこの近くに住んでいた私の級友からの情報をもとに平成23年秋この地番付近を歩いてみました。

古小鳥動物園バス停留所から坂道を上り周辺を歩きました。周辺は一戸建ての住宅が多い閑静な住宅地でしたが、大体このあたりだろうと見当をつけた付近ではこれといった住宅は見つからず、マンションの建設工事が行われているのが印象に残った程度で、雨が激しくなってきたところで帰途につきました。売却してから数えても66年、空襲でこのあたりも被害があったはずですが旧宅が戦災を免れたかどうかはわかりませんし今となっては何も分かりません。帰宅してからインターネットの検索エンジンGoogleで検索してみましたが、地番表示が変更になっただけで特定することができませんでした。

愛弟子とのツーショットーその1ー

研究員 宮入建三

当館展示室に「温泉でくつろぐ慶之助」というタイトルで下のような写真があります。

この写真に写っている人物は誰なのか、今まで分かりませんでした。

本年5月3日、静岡市に在住の高橋孝雄さんが息子さんとお嬢さんとともに来館されました。館内を館長がご案内しているうちにこの写真を見て、子供さん達が「アッ、お祖父さんだ」と言われ、お父さんもどれどれと覗きこみ、皆さんで感嘆のひとときでした。

今回のご来館に際しての事前の連絡と当日いただいた資料により、この写真の人物は高橋孝雄さんの父上で故高橋操三郎氏であることが分かりました。同氏は、九州帝国大学医学部を大正13年(1924)に卒業され、宮入慶之助のもとで助教授を勤められ、その後山口県の小野田日赤病院に移られ、院長として定年まで勤められたとの

ことです。調べてみると慶之助との共著論文もあることが分かりました。

ご一行の皆様のお話により、この写真は、宮入慶之助と高橋操三郎とが山口県秋芳洞で写されたものであることが分かりました。ご一行の来館により、私たちが知らなかったことがわかって、大変ありがたいひとときでした。

操三郎氏は家族に慶之助の人徳や人柄を大変尊敬していた話をされていたとのこと。

今回、寄贈いただいた高橋操三郎著の論文別刷「私の九大生時代の諸教授に思う」(東京医事新誌、昭和35年2月号・3月号)で慶之助に対する思いと人柄が表現されているのでご紹介します。

17, 宮入慶之助教授——衛生

私は、先生を評して「人格一世に高く、

識見俗を抜く」と嘗ての著書に書いているが、先生の講義は、たしかに超俗的な所が多かった。講義の際の弁舌に、態度に、容姿に、私は、先生のすべてに、良い記憶のみ持っている。

先生は、識見高き真性の学者として、又、宮入貝—日本住血吸虫の中間宿主—の発見者として、九大の声価を高からしめた第一の人であった。先生は、私の卒業後、親しく師事した最初の恩師である。当時、先生の定年退職まで、僅か1ヵ年余りではあったが、その間、私の受けた感化は非常に大きい。学生当時から、先生に私淑していた私は、親しく師事するや先生に心酔し、精励し、研究に所能を傾けつくした。そのせいか、先生も特に私を愛せられた。そして、この師弟の敬愛親交は、先生の生涯を通して続けられた。(以下次号に続く)

記念館活動記録

□ クリヤホルダ:平成24年3月20日 記念館所在地区を管轄する西寺尾区の年度総会で区民に当館のクリヤホルダを配布・贈呈。

□ 篠ノ井地区文化財説明板設置:3月31日 篠ノ井地区住民自治協議会により、篠ノ井地区文化財説明板として当館の説明板が道路脇に設置されました。同時に、冊子「ウォーキングガイド&マップ」が発行され、当館が掲載されました。

□ 第64回日本衛生動物学会大会での活動:

3月29日から31日まで信州大学繊維学部(長野県上田市)で開催された日本衛生動物学会大会会場の教室の一角で「宮入慶之助の業績とミヤイリガイ」と題する展示活動をさせていただきました。パネル3枚とカイ標本などを展示、記念館のパンフレットや記念館だよりの配布を行いました。(写真右)

31日午後は講堂で「住血吸虫の中間宿主は?特に日本住血吸虫症のミヤイリガイ他」と題する市民公開シンポジウムが石井 明氏が座長で開催されました。講演テーマと講演者は次のとおりです。

- * 日本のミヤイリガイを中心に、その分布とGISによる監視
- * 甲府盆地の宮入貝について
- * 中国の *Oncomelania* 属貝と日本住血吸虫症の動向
- * メコン河のメコン住血吸虫症と中間宿主を中心に
- * アフリカの住血吸虫症とその中間宿主
- * アフリカの中間宿主貝について

二瓶直子
薬袋 勝
太田伸生
松田 肇
嶋田雅暁
野田伸一

当館では、このシンポジウムの模様を長野市立博物館友の会ビデオクラブの協力を得てDVDに記録して講演者に贈呈しました。

今回の活動については、大会長の信州大学繊維学部平林公男教授に大変お世話になりました

した。お礼申し上げます。

□通常総会開催；平成24年6月9日、ホテルサンルート長野東口会議室において平成23年度の通常総会が開催され、平成23年度の事業報告、同収支決算、平成24年度事業計画が承認・可決されました。平成23年度の収支は、前期繰越 271,451, 収入 612,490, 次期繰越 465,446 (数字単位はいずれも円) でした。会員状況は、正会員 24名、賛助会員 47名です。今年度の事業計画の特徴は、カイ発見100年を記念するイベント・行事の企画とその準備で、これについての具体的な討論が行われました。

□九州大学で打合わせ：7月13日 多田名誉館長と宮入館長が九州大学医学部(福岡市東区馬出)の片野医学部長を訪問、来年医学図書館でカイ発見100年記念展示を開催することを提案、次いで医学図書館を訪問、関係者に挨拶。

□建物補修：6月27日： 記念館の屋根(カラー鉄板)の補修塗装が完了。

□寄生虫学会記念行事打ち合わせ：9月25日 館長が東京医科歯科大学で開催された第82回日本寄生虫学会大会でのカイ発見100年記念行事に関する準備会に出席。

□エアコン設置：9月30日 記念館にエアコン据付が完了。

賛助会員入会者 (次の方が賛助会員に入会されました。順不同、敬称略)

高橋 優三

ご支援へのお礼 (順不同、敬称略)

次の方々からご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

寄金 大島 芳正、高橋 孝雄、福田 初江、清永 孝、多田 功、
石井 明、澁川 眞喜男

記念館周辺美化 宮入 昭夫

編集後記

○この6カ月の間に図書館関係の専門家の来館が2回あり、それぞれ貴重なアドバイスをいただきました。ひとつはデジタルアーカイブの話、つぎは酸性紙を使った書籍への対策のことでした。それぞれについて当館も対策を考えたいと思っておりますが、それらに共通する事項として考えなくてはならないのは情報の記録媒体の今後についてです。

確かにパソコンの最新技術を使えば、膨大な書籍・印刷物・写真などが薄い円盤の中に詰め込むことができ保存・再生が楽になりそうです。しかし、これらの記録媒体である磁気ディスク、光ディスクなどへの情報記録は何年保証されるのか、これに情報を書き込み・読み出す装置は何年保証されるのか、少なくとも100年以上は使い続けることができるのか、大変迷っています。それに比べれば紙は、古書店に行けば200年位前の文書がざらにあることを考えるとまだ

まだ紙は重要な情報の記録媒体と言わざるを得ません。また、動画や音声などの保存も難しいと考えます。

○最近、山本太郎氏の著書「感染症と文明—共生への道」を読みました。その中で「根絶は根本的な解決策とはなりえない。病原体との共生が必要だ。」という言葉が中間宿主発見100年を考える上で参考になるのではないかと考えさせられました。

宮入慶之助記念館だより 第17号
発行者

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
編集者 宮入源太郎

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾2322

Tel&Fax (事務局)026(293)3828

(記念館)026(293)4028

ホームページアドレス <http://www5.ocn.ne.jp/~miyairi/>

発行日 2012(平成24)年 10月10日